

Triumph onedollar ～勝利へ の放浪者～

リューヤ

フェア軍本部より東から進軍する斬撃強襲突撃部隊ミネベアの兵士たちは非常にリラックスした心境で砂の大地を踏みしめていた。ここ数日フェア軍に属するあらゆる地点支部を攻撃し続け勝利を収めてきた彼らには、その勝利が心にゆとりと自信を持たせ誰一人脅える事無く最後の戦いに臨もうとしていた。その中の一部には今回の作戦は何時間で決着するか話したり、自分たちが斬り殺した人数を競ったり、極めつけは狩り取った首の数で賭けに興じようとする非常識な兵士まで現れる始末だ。

もちろん全員が全員緊張感の欠片も無い行動をとっているわけではない。例えばミネベア軍を率いる若き筆頭、ネイビーは7000の軍勢の後尾でどのように攻めれば自軍への被害を最小限に抑えられるか・・・その指示をどうやって伝えれば全員の耳に入れることができるかなど、とにかく安全策を考えながら歩いていた。

先行の長槍部隊、主力の刀剣部隊、念を入れて準備した隠密・暗殺部隊をどう使うかが勝利のカギを握ると念頭に置き考えているが・・・正直なところ考えているのはそれだけではない。ネイビーは俯いて歩きながら、この作戦が完了した「後」の事も考えている。むしろそっちが本命と言っても過言ではないくらい重要な内容だ。

正直な話、ネイビーは今回の作戦に参加はしたが誰一人信用できる人間がいないような気がしてならない。自らもそうだが、同盟を組んだ他の連中の腹の中は決して白くなどない。きっと全員が同盟を離反して全ての軍に総攻撃をかけてくるのは目に見えている。何せフェアを除いたシーバルのトップにある軍隊が一堂に集結するのだ、隙を見て攻め入り、あわよくば壊滅させてしまえばフェアに代わる新しいシーバル最強軍隊の名誉が手に入り、国内の領土も領民も・・・そして最大の軍事力と超額の軍資金が事実上独り占めできてしまうからだ。間違いなく全員がそれを考えているに違いない・・・と推測できる。ミネベアは兵力は多いが軍事力が秀でているわけではない。所属しているのは時代遅れとバカにされる刀剣部隊のみ、ドラゴンも引き連れてないし銃火器の持ち合わせも無いに等しい。もし本当にシーバル頂上戦争が始まってしまったらこのミネベアが真っ先に潰されてしまう可能性も危惧される。

作戦終了後は余計な手柄を立てようとせず、急いで逃げた方がいいのかもしれない・・・。

あれやらこれやら深く思考を回しているその最中、部下の一人が軽装の鎧と腰に差した剣とをガチャガチャ擦れさせながら近づいてきた。

「筆頭、アーウェン到着まであと20分弱、本作戦開始まであと30分を切りました。指示をお願いします」

「分かってる・・・皆まで言うな。予定ポイントに到着したら当軍は一時その場で待機。作戦通りヴォルカニック、シュマイザー両軍の先制砲撃を確認したのち長槍隊を先頭に俺達も突撃する。以上だ」

「了解、そのように伝えておきます」

「頼む・・・」

戦果は上げつつ、被害と最小限に抑える・・・それがこのミネベア筆頭、ネイビーに与えられた

最大の使命として顔を打ち付ける風と共に気を引き締め直した。

だがその直後、その吹き抜ける風と共にネイビーの耳に兵士たちの悲鳴のような声が届いた。同時に遙か前方・・・先行の長槍部隊のいる位置でまるで嵐のように砂が舞い上がり、襲い掛かる突風と共に次々と悲鳴が鳴り響いた。

「っ！何事だ！？」

「報告します！！先方長槍部隊が何者かの攻撃を受けているとの報告です！被害は部隊の20%！」

「なんだと・・・まさかフェイファーが待ち伏せていたのか！？」

完全に想定外の攻撃にネイビーは困惑し、その困惑と不安感は一瞬にして全部隊に伝わってしまった。

これまでに叩き潰してきたフェイファー軍の支部はほぼ無抵抗のまま壊滅まで追い込んできた、今回もきっとそうなるだろうとタカを括ったのが全ての失敗だったのかもしれない。

ネイビーは口内で激しく舌打ちをしながら自らの愚行を反省した。

「敵の数は・・・いったいどんな攻撃を受けている！？」

「それが・・・もしこの報告に間違いがないのなら」

「何人なんだ！？」

「敵の数は・・・一人です！！」

所変わりここはフェイファーへ進軍するミネベア軍の最前方、長槍部隊。今一人の兵隊が2 mはあろう槍を水平に構え、腹の底から気合と共に大声を上げながら敵に向かい突進を仕掛けた。しかし兵士はその男とすれ違った瞬間、槍は10 cm間隔でブツ切りにされ・・・兵士は何が起こったのか理解するよりも早く上顎が両断され、歯の噛み合わせから上が砂の上に落下して本人も死んだ。

その神速に達したスピードの斬撃を、その場にいたすべての兵士は視認することはできなかった。どころか、その男が手にしている刀が鞘から抜かれる瞬間すら見えなかった。手が刀の柄に触れたと思ったら次の瞬間死体が出来上がっている、そんな奇妙な惨劇が目の前で繰り広げられ続けていた。

すでに120人、長槍部隊がああ男一人の手によって殺されている。恐怖を感じ始めた兵士達は皆一様に平静を保とうとするように槍を握りしめ、額から汗をにじませている。

足元に転がった死体を爪先で払いのけ、男は余裕を感じさせるようにメガネの位置を直しながらミネベア軍へ単身進撃を続けた。

男の名は、「ジン・K・ジェイド」

「よう、あんた等さあ・・・大人しく大将首オレによこせ。こちとら事情があつておっさんたちに加勢しなきゃなんねえんだけどよう・・・ぶっちゃけ面倒なんだわ」

ジンは寝ぼけ眼のような半開きの目で周囲を見回しながら懐からタバコを取り出し、一本啜えてさっそく火を付けた。

気合でも入れたつもりなのか一呼吸で一本のタバコを灰に変えてしまうと、胸の中に染みわたる煙を吐き出し、頭の中がシャキッと目覚め兵士たちを睨み直した。

「言うこと聞くなら残りの全員見逃してやってもいい。邪魔さえしてこなけりゃオレはそれでいいんだよ。」

ただし、と付け加えながらジンは刀に手をかけた。左右の腰にぶら下げた刀を抜くと、光を反射した刀身が怪しく煌めき、まるで威嚇をするようにその存在感を放った。

「オレの邪魔するんなら誰一人手加減はしねえ。相手してやるからよう・・・死ぬ準備のできた奴から順番にかかって来いやコラア！！！」

「ま、また来たぞ！！」

「逃げろおおお！！」

数人の兵士が脅え戸惑い、自らが跨っているドラゴンの操竜も覚束ないまま逃げ出そうと試みたが・・・もう遅かった。

兵士の眼前に、あの巨大な物体が飛んできた。巨大な塊は兵士の頭から胸を一撃で・・・まるで人形を壊すように抉り、兵士は肉塊となってドラゴンから落馬ならぬ落竜してしまった。傍らにいたもう一人の兵士は眼前を通過したそれを、首を振って行方を追いかけた。

ジャラジャラガラガラと耳障りな非常に太い鎖のこすれ合う音、血飛沫と共に鼻孔を吸激する強烈な鉄の匂い。その物体の質量はまるで一つの巨岩石、迫りくる恐怖は隕石の如し、そしてその物体の形状は・・・見たまんま「人間の拳」そのものだった。

男は手に握っている鉄棒をちょちょいと操作すると、放り投げられたその巨大な拳骨が竿で釣られた魚のように空中で弧を描きながら男の下に帰ってきた。鉄棒と拳骨を繋いでいる鎖は拳骨の中に仕込まれた巻き取り機により巻き込まれ、そのまま元あるべき姿・・・拳型のウォールハンマーに戻った。

この常識から逸脱した武器をさも平然と振り回している男の名は、「アゲート・モルガナイト」と言った。

「っっっ最高!!!マジでこれ最高さ!!!ドクターマジ天才さ!!!」

「キ〜ッシッシッシッシッシ。もっと褒めてもいいんだよバンダナ君？」

アゲートの隣で背筋に寒気がするような奇笑を漏らしているのはこのアゲートが持っているハンマーの開発者、「ファントム・C・タンザニヤ」だった。

アゲートが持っているこのハンマーの特徴は先端と柄の部分が分離できること。接近戦が主体だったアゲートはドクターに頼んでハンマーのリーチを鎖分銅のように先端と柄を連結させることに成功。扱いは難しくなったがそこは持ち主の才能と努力のたまもので無事習得、修業期間が長く得られたのが最大の要因であろう。

おかげでアゲートはご機嫌だ。餅つきの杵のように大きく振りかぶり、振り下ろすのと同じタイミングで手元に取り付けられたスイッチを強く押すと接合部分の連結が解除されて先端の拳が鎖と共に前方へ勢いよく飛んで行った。拳は正確にドラグナー・・・「スーパーギン軍」の操竜師を弾き飛ばすと、握っている柄をちょちょいと操り伸びる鎖を操ってドラゴンの首に引っ掛けた。そこから先は魚の一本釣りよろしく、全身の力を振り絞りドラゴンを自分の元まで引きづり寄せってしまった。

するとアゲートはそのまま鎖を外すと暴れて逃げてしまう前にそのドラゴンの背中にヒョイツと跨った。このままドラゴンを自分の物にしてしまおうという腹だった。

「キシシ、乗れるのかい？」

「馬と同じっさ!ってかドクター危ないさ!!!」

アゲートが気が付いたのはドクターの後方から迫ってくるドラグナー部隊だった。皆槍を構え、ドラゴンは目を血走らせ牙をむいてこちらへ一直線に走ってくる。

しかしこの程度で動じるほどドクターの肝は小さくなどない。ドクターは普段隠れて見えない袖の中から金剛杵を取り出すと、振り返ることなく静かにパチンッ！と指を鳴らした。

直後、ドクターの足下が瞬間凍りついてしまった。絨毯を敷くかのように瞬く間に氷の床は地面に広がり、迫りくるドラグナー部隊の足下まで一気に凍りつかせてしまった。それだけにとどまらず、氷の表面は剣山のように鋭く細かな棘が無数に乱立し、それを踏んでしまったドラゴンは悲鳴を上げて氷の床の上で転げ落ちてしまった。同時に落馬ならぬ落竜してしまった兵士も同様に剣山の洗礼を派手に受け、全身を穴だらけにしながらか悲鳴を上げて絶命してしまった。

ドクターとて毎日屋内に籠って研究や開発ばかりしていたわけではない。グスタフと戦った時の反省として自らの魔力と魔術を戦闘用に強化していた。ジェット程ではないかもしれないがその実力は立派な氷の魔術師の域に達している。

「うわぁ・・・えげつねえさ」

「キシキシキシキシ、問題ない・・・ところでバンダナ君、小生に考えがある。しばらく小生の言うとおりに走ってくれるかい？」

「え・・・ああ、分かったさ！」

ドクターはアゲートの後ろにヒラリと飛び乗ると、手綱を口でくわえてさっそくドラゴンを走らせた。案の定ドラゴンの捜査は馬のそれとほとんど同じであり、違うのは乗り心地と走行のパワーくらいなものだった。

故にアゲートにはドラゴンの操竜が可能だった。

「おっしゃ！！ぶっ飛ばすっさ！！！」

「混沌の宴、共に楽しもうじゃないか！！！」

空には多数の翼竜部隊「ドラグーン」率いるブラックホーク軍がひしめき合っている。だが現在、彼らも地上の連中同様予定外の邪魔が入りそれを殲滅すべく戦闘中であつた。

十分無視しても良い数であるにもかかわらず、彼らはそれを無視しようとはしなかった。なぜならそれはドラグーンとは違い、翼竜にも乗らずに空を縦横無尽に飛行していたからである。

ドラグーンの一人がそれに向かって火炎を吐き出して攻撃しても、それはまるでハヤブサのような急降下で躲し、また燕のようなスピードで瞬時に目の前まで接近してきた。目の前に突如現れたそれは、表現するのならまるで炎を纏った巨人だった。燃えるようにたなびく長髪と全身をつつむ焼けた鉄のような筋肉と装飾のような鎧をまとった巨人はわずかに口元をゆがめると、間髪入れずに丸太のごとき拳を叩き込んだ。

操竜師だけではなく跨っている翼竜もろとも拳が貫くと、貫かれたそれらがたちまち炎に包まれて燃え盛りながら地面へ落ちてしまった。

それを目撃していたブラックホーク司令官グリースは焦りの色を隠せずにいた。何せこれでもう150騎異常があれ一人の餌食になってしまっているのだから。

何が起きているのかさっぱりわからない、戦闘が始まってもう数十分が過ぎているにも拘らず敵の全貌が全く見えない。なぜこうできを受けているのかも問題だが、一番問題なのは奴が翼も竜も無いのにも関わらず単独で飛行していることが彼にとって一番の問題であった。

改めて今空中に留まっているあいつを見上げた。

黒いローブと深緑の髪が強風を受けて激しくなびいている。その傍らには例の赤い炎の巨人が片膝をついて跪き、本人は有ろうことか一本の木製の杖の上に立っている。

誰かに見られていることを混じた奴は・・・彼女は視線を左下方へ向け、見上げているグリースへ対して細い目でにらみ返ししながら歯肉を剥きだしてドクター直伝「嫌味の込められた笑み」を浮かべる。

彼女の名は「ジェット・アメジスト」と言った。

「貴様は・・・貴様はいったい何者だ！！？」

業を煮やしたグリースが、ジェットへ向かって出せるだけの大声で直接問いただした。ジェットの存在に恐れだした翼竜たち呂なだめ始めている全ての操竜師たちも、ジェットの口から答えが返ってくることを期待しながら黙ってその場で耳を傾けている。

「・・・・・・・・何だチミはってか？」

ジェットは左手を持ち上げて軽く指を鳴らすと、それまで一人だけだったはずの炎の巨人・・・召喚魔人プロメテウスがさらに5体も出現した。ジェットはあれからさらに自分の魔力値の向上を図り、体内に保有できる魔力の入れ物の許容量拡大に勤め続けた挙句、以前よりも3倍近い魔力を保有できるようにまでなった。

そのおかげで魔人も一度に最大で6体まで召喚できるようになり、魔術の攻撃力も格段に跳ね上がっている。

今のジェットにかなう魔術師はこの世にいるかどうかすら怪しいレベルまで達してしまった。召喚された魔人はジェットを中心に六方を囲み、各自自分の見えている範囲の敵の数を把握するかのようにギョロギョロと見回している。

「そうです、アタシが・・・・・・・・地獄の釜の火元番だよ！！！」

南方より攻め入ろうとしていたシュマイザー軍武装戦車車両部隊は苦戦の遥かに下をゆく、悲戦を仕入れられていた。総兵力3000の軍団が、わずかたった二人を相手にあろうことか残り兵力1000を今まさに切ろうとしている再中であった。

「撃ち方用意！！照準と共に撃てえええ！！帰りの分の弾と燃料など考えるな！！今すぐに奴らを撃ち殺せえええええ！！！」

シュマイザー総帥クーガーは焦っていた。今作戦において自らの軍が最大の軍事力を誇っているものだとばかり考えていた。今だってその考えに疑いなど持っていない。なにせシュマイザー軍が保有しているのは多数の戦車と最新の科学の英知を終結させた飛行可能装甲兵器、航空爆撃型装甲ヘリコプターなのだ。前時代より人間が空を飛ぶことは全人類の夢であった。

その夢を、シュマイザーは科学の力でこの「ヘリコプター」と言う形で叶えることに成功したのだ。ブラックホーク軍のように翼竜を使って空を飛ぶこともできるが、それでは技術もいるし、第一にドラゴンの背中に乗る前に食われてしまう可能性だってある。

それに比べてこのヘリコプターは素晴らしい。戦車にも使用している大型のエンジンを装備することで、重たい機体をプロペラの回転のみで持ち上げるのに必要なだけのパワーを得た。

装甲を纏うことで、銃弾を弾き返すことだってできる。

操縦するのは人間で操縦されるのは機械だから襲われる心配も無い。

機内に居れば安全だし空中から地上へ攻撃することもできる。

基本的に一人乗りしかできないドラゴンと違いヘリコプターは最大で10人まで搭乗可能。

火を吐き爪で切裂き牙で噛み砕くしかできないドラゴンと違い機関銃、ミサイル、ロケットランチャー、爆弾の投下まで可能なヘリコプターは、まさに未来の最強兵器であると確信している。

なのに・・・なのにも関わらず・・・1000機も準備してきたヘリコプターは残りたったの130機。残りは戦車のみ・・・。なぜこんなことになってり待ったのか誰にも分からなかった。こうなってしまった原因を作った張本人たちは、この砂漠の大地を踏みしめながら残りの戦車部隊へ向かって歩いていた。ともに一本に縛り上げた長髪をなびかせ、一人は破壊した戦車の砲身を片腕で担ぎ、もう一人は両手にそこで拾った不発弾を持っている。

彼らの名は「古虎眼」「古猫眼」と言った。

「・・・また来るな」

「じゃあ今度はワタシが上をやるネ」

「ああ・・・とっとと終わらせるぞ」

「アイナ！」

数台の戦車の砲口が虎眼たちを正確に狙い、今すぐにでも弾を打ち出そうとしている。最初のうちは苦労したが、次第に直感的に砲身から砲弾が飛んでくるタイミングが分かるようになってきた。だからこんなことだって可能である。

3台の戦車からとうとう砲弾が発射された。聴覚障害を起こしてしまいそうなような激しい爆発音と共に3発の弾頭が虎眼へ向かって襲い掛かる。

しかし虎眼は冷静に手に持っている戦車の砲身を両手で構え、待ち構えた。その格好たるや、まさにバッテリーボックス上にて絶好球を待ち構えるスラッガーの如くであった。そして・・・

ガガガキイイイイイイイイイン!!!

もはや虎眼は人間ではない。迫りくる砲弾を、あろうことか一本の砲身で3発全て・・・打返した。砲弾は全てピッチャーを強襲するような激しいライナーとなり、鈍亀の如き戦車はそれに対処しきれず砲弾が直撃、たちまち周囲の戦車を巻き込んで爆発四散してしまった。

それだけで終わらない。虎眼は砲弾を打返した影響でひん曲がってしまった砲身を渾身の力でブン投げると、ブーメランのように回転しながら・・・しかし永久に帰ってくる事無く一台の戦車に突き刺さりこれまた爆散。

砂を巻き上げながら獲物を捕らえる野獣のように、一塊に集結していた戦車隊の中に特攻しその

中の位置譜代の戦車に狙いを定めた。素早く戦車の真下へ滑り込むと、車体を持ち上げるジャッキのように両手で戦車の底を掴み、両足でもてる限りの力を爆発させた。するとどうだ、40～50tは下らない重量を誇る戦車が、人間の筋力のみで持ち上げられてしまった。

機内で操縦していた兵士は困惑と恐怖の悲鳴を上げながら混乱しているが、虎眼はそんなことお構いなしだ。またしてもありえないことなのだが、虎眼はその戦車を一度情報へ向かって軽く放り投げて角度を調整すると、落ちてきた戦車の砲身をガッチリと掴んで持ち上げた。この光景、まるであのハンマーを担いだときのアゲートに似ている気がするが、残念ながら発想のスケールでこちらの圧勝である。

虎眼は一切の為際も無く、その戦車をまさにハンマーと同じ要領で振り下し、現前に鎮座している敵戦車を一台紙風船を潰すように破壊してしまった。

もう一度言おう・・・虎眼はすでに「人間をやめている」。

猫眼もまた圧巻である。猫眼の頭上では、アーウェンへ向かって飛んで行こうとするヘリの集団がいた。先ほどクーガーがついにヘリコプター部隊に戦線離脱を命令し、本作戦であるアーウェンへの攻撃を指示したのである。この時クーガーは無線越しでもわかるくらいの泣き声だったのは兵士たちの内緒である。

それをみすみす見逃す猫眼ではない。猫眼は砂の上に10個ほど、先ほどまで持っていた直径30cmはあろう不発弾と一緒にその辺で拾った戦車やヘリの大きな破片を並べて突き刺している。

目測でヘリまでの距離を角度を大雑把に計算すると、猫眼は気合を込めてそれを順番に蹴り上げて行った。

蹴り上げられた衝撃でひしゃげてしまったそれらは正確に弧を描きながら飛来し、10発全てヘリコプターへ直撃、一撃で轟沈させてしまった。

猫眼もまた虎眼同様「人間をやめている」。この二人がここまでの力を手に入れるまでどんな修行をしていたかなど・・・考えたくもない。

「フン・・・この程度で俺達を倒せると思ったとは舐められたものだな、**貴様ら全員根性叩き直してやるから覚悟しろ！！**」

「曰く、戦車1台10億L・・・**壊す価格はプライスレス！！**」

北方より攻撃を仕掛けてきた武装機動歩兵軍隊ヴォルカニックは、アーウェンより北へ3kmの位置で立ち往生を食らっていた。予想を反していたせいなのか、またはこの攻撃に対してこちら側の装備の相性が悪かったのか・・・はたまたその両方なのか。その原因は誰にもわからない。予想できただろうか、2km彼方から正確にこちらの装備している大型火薬武器のみを狙撃できる人間がいるだろうか？それも立て続けに何十発も、一発の弾丸も撃ち漏らすことなく全ての主要武器を破壊し尽くせる狙撃手がいただろうか？

たった一人で6500も用意した兵士たちを、こんなわずかな短時間で1300まで減らせる兵士がこの世のどこに居るだろうか？

彼は両腕に巨大な火器を装備していた。この日の為・・・と言うわけではなく友人が趣味で暇つぶしに作ってプレゼントと言う形で押し付けられてしまったバカげた逸品だ。

ガトリングガンとは、主に5本から7本の銃身を環状に並べて回転させながら給弾・装填・発射・排莖を自動で繰り返すいわゆる連発砲である。彼は6本に束ねた銃身を4つ用意し、あろうことかそれをさらに一つの土台に強引に接続させることに成功させてしまった。総重量58kg、とても人間が携帯できる武器ではないため土台に三脚と車輪を取り付けることで、固定砲台とし

て活用できる範囲にまで落ち着いた。

彼はそれを2台、持たされている。2つのガトリングガンで一周6発×4門×2台＝全ての銃身が一回転すると一度に48発発射可能で、毎秒50発発射できる砲身×8＝毎秒400発の弾丸の嵐がヴォルカニック軍に襲いかかるのだった。

おまけに発射している弾丸はただの弾丸などではない。それは射撃手本人の体内から生成された魔力を弾丸の形で鎚はなっている超特殊な弾丸だった。

彼の名は「コンバット・ベルグマン」といった。

コンバット・・・コルトは自らが宿している雷の魔力を弾丸の形に生成し、両腕で装備しているこの化物機関銃に休むことなく装填しながらブツ放ち続けている。あらかじめ自前の狙撃用ライフルでヴォルカニック軍が持ってきていた大型火薬兵器（ミサイル）を破壊しておいて正解だった。陣内での爆発で敵の数が思ったよりも多く減ってくれた。後はこのまま自分の魔力が続く限り弾幕を貼り続けていれば問題は無い。

・・・と思っていたのもつかの間、予想より早く悲鳴が上がり始めた。ヴォルカニック軍ではない、コルトが持っているこの2台の化物機関銃の話だ。ガトリングガンは弾を供給し続けている限り無限に撃ち続けることはできるが、逆に弾が多すぎると砲身が長く持たない。発射と同時に銃身内で爆発や弾丸の摩擦熱で銃身が徐々に熱くなり、冷却を怠ると熱くなりすぎた砲身は溶けて、曲がり、最悪射撃すらできない曲がった鉄の筒になってしまう。今がまさにそうだ、8本の銃身全ての表面が赤く発光するまで高温になり、高熱を帯びて銃身があらぬ方向を向いてしまっている。これではもう使い物にならない。

そしてそれはヴォルカニック軍にとって限りなく少なかった勝機でもある。弾幕が無くなった途端、連中は雄叫びを上げながら小銃片手に猛突撃を仕掛けてきた。

コルトの活躍のおかげでヴォルカニック軍兵士が所有している残りの武器は各々小銃一本、拳銃一丁、手榴弾4発しかなくなってしまった。本来の作戦を遂行するには手薄な装備だが、まだ1300もの数がある。きっと何とかかなると思っている。

それをコルトは許す気などない。コルトは正面から雪崩の様に押し寄せる敵軍を目前に、装備していた化物機関銃を投棄。代わりとして手荷物だったバッグの中から自分の装備を取り出す。

両手に拳銃、両肩にはグレネードランチャーとライフルを一丁ずつブラ下げ、口には腰のホルダーに差していたナイフの柄を咥える。その直後、コルトの糸のように細い目が開眼し、瞼の奥からルビーのように真っ赤な瞳が露わになる。

コルトは本気だった・・・その証拠として、普段人前では絶対に脱ぐことの無かった愛用のニット帽をその場で脱ぎ捨て、バッグの上に放り投げたのだ。この帽子に何の意味があるのかはわからないが、とにかくこれがコルトの本気モードであることに間違いはない。1対1300・・・上等だ。

「申し訳ないんですがこっちも余裕がありません。死にたくないのならこっちに来ないでください・・・さもないと撃ちます！！」

「ミネベア軍進行完全停止、全兵力中45%ダウン！」

「上空よりブラックホーク軍ドラグーン部隊の半数が墜落、接近中のシュマイザー航空爆撃部隊壊滅！」

「スーパーギン軍ドラグナー部隊、地上表面に突出した氷河に進行を阻害、損壊率30%！」

「シュマイザー軍戦車車両部隊現在7割が破壊されています！進行不能、一部車両が後退を始めています！」

「ヴォルカニック軍内で謎の爆発事故が多数発生、損害不明！」

何もかもが信じられなかった。フェイファー軍ステアー中将を始め、司令室に取り残されていた全ての兵士たちが此度の一斉進軍に際し、死ぬ覚悟をしたのが一時間前。最初に衝撃的な報告を受けたのがその10分後、ジンが単独でミネベア軍に戦争を挑みに行ったと聞いた時は誰もがその報告を疑った。だが新しい知らせはそれから続々と司令室の中に飛び込んできた。ミネベア軍をジンが、スーパーギン軍をドクターをアゲートが、ブラックホーク軍をジェットが、シュマイザー軍を虎眼と猫眼が、そしてヴォルカニック軍をコルトが……5つの軍隊を、現状でこの国のトップ5の軍事組織を、たった7人で応戦し、あろうことか優勢に立っている。

数えて約2万の大軍勢を、彼らはわずか1時間足らずで半分以上壊滅させてしまったのだ。ステアーは何が起こっているのか訳の分からないまま椅子に腰かけ、モニターの中に映っている彼らの戦闘風景を眺めていることしかできなかった。

何のためにあんなことをやっているのか、何の目的でこんなバカげたことを実行しようと考えていたのか……皆目見当もつきやしない。

「あの人たちときたら……何をやってくれているのだか」

「中将……あの……我々はこれからどうすれば？」

「……」

「まさかこのまま彼らに全てを任せるつもりですか？」

「……」

ステアーは何も語ろうとしなかった。部下の言うとおりで、できることならば自分達だって彼らの為に共に戦いたいと思っている。でもそれはもうできない……戦争に使うための凶悪な兵器はすべてこの一月以内にほとんどスクラップにしている。戦うための力はもうない。

力も無い、兵士もいない、そんな軍隊に一体何ができようものか？

だからこそステアーは今の自分達にもできることはなんなのかこうやって考えているのだった。

「中将、何か言ってください！我々は、もうこの戦争を眺めていることしかできないのですか！？あんな若者たちを、たった7人の民間人を放っておくのですか！？」

「中将！」

「「中将！！」」

「「中将！！！」」」

．．．．．取り残された部下たちの一言一言がステアーの胸に深く食い込むようだった。居ても立っても居られないのは自分も同じ、できることなら今すぐにでも立ち上がりたとえ鉄パイプ一本を持ってでも戦いに参加したい。

しかし今は．．．．．

．．．やらねばならないことがもう一つだけある。

「．．．司令部に所属する各員に告ぐ、皆に特別な任務を与えたいと思う！」

所変わり、ここはとある部屋の中。周囲はまるで夜のように真っ暗闇だった。それでも彼、アバカン軍総司令スティンガーが一切躓くことなく悠々と歩くことができたのはわずかな照明と周辺の機材の発光によるものだった。

スティンガーは自分専用にした専用のソファの上に腰を落とすと、身の回りで忙しくなく目の前の機械を操作し続ける部下たちの声に耳を傾けた。

「燃料補給完了、エンジン点火。出力20%」

「弾薬の装填完了まで残り400秒、搬入作業急がれたし」

「機内メインコンピューター機動完了、システムオールグリーン」

「機内気密性チェック完了、問題なし」

「リミッター設定完了、パーソナルコード確認、異常なし」

「エンジン内出力上昇、出力35%。出力臨界点まで残り150秒」

「主砲、副砲、その他各種主要装備点検完了。メカニックは艦内に移動せよ」

「艦内通信機、メインからサブまでリンク完了。こちらブリッジ、各設備管理責任者は応答願う」

「高高度索敵機（サテライトリンク）接続完了。」

「メインエンジン1号機から4号機出力上昇、現在70%で安定。発進可能」

「・・・クフフフフフフ」

全てが順調だった。先代のアバカン総司令の時代から現在までかけて開発し続けてきたこの「船」が、ついに今日歴史の表舞台に花形として出演できる日が来たのだ。嬉しくないわけがない。今回計画したこのフェア・ツェリザカ掃討作戦、もちろん裏がある。その内容はいたって簡単でありスティンガーだけでなく全ての組織が共通で考えていることだ。

「作戦終了後の反乱」

作戦が終了した際、各組織に支給される報酬はフェア・ツェリザカの所有する領土の均等配分・・・

などと言っているが当然それっぽっちで満足する馬鹿などいない。アーウェンを攻撃し終われば全軍兵士も武器も弾薬もある程度消費してしまうのは当たり前。兵が疲弊し残弾が尽きてしまえば後はこっちのもの。

一堂に会した5つの組織をその場でフェア軍ごと叩き潰してしまえばその組織の領土を全て総攬いすることができる。国内の半分を所有するフェアの領地+5つ分の組織の領土、もしこれを全て手に入れることができたならその軍は完全な意味でこのシーバルを支配することができるに違いない。

兵力と武装の強化、軍事力拡大、領民の増加は徴収する税金の増加につながる。そう考えれば

誰だって欲しくなるに決まっている。

そこでスティンガーは考えた。確実に自らの軍が勝利するための方法を、シーバルーの全てを我が物にするための算段を、あの馬鹿軍隊全てを出し抜き一人残らず皆殺しに仕切るための手段を。

そして今日、その目的が達成されようとしている。

この「船」によって。

「全作業員艦内に収容完了、最終安全装置解除完了しました！」

「艦内全システム問題なし、いつでも発進できます！」

「ついに・・・ついに来たか。クククククククク・・・」

「総司令・・・いえ艦長、発進準備全て整いました」

「よろしい・・・上等だ」

「味方への通信は如何しますか。発進のGOサインを送りますか？」

「構わん、忘れていたことにしておけ。向こうから聞かれたらすっとぼけろ。どうせ全員死ぬことになるのだからな」

舞台の上に全ての役者と最後を飾るのにふさわしい主人公の準備が整った。スティンガーはサングラスの奥で目を細め、直視しただけで気分を害してしまいそうなような怪しい笑みを口元に浮かべた。ここから先はアバカン軍総司令としてではなくこの船の・・・

砂上走行型強襲武装戦艦「ゴライアス」の艦長として最初の命令を下した

「ゴライアス抜錨と同時にメインゲート開門！！これより、最大船速にてアーウェンへ進撃をかける！！我らこそがこの国を統べるに相応しい者であることを証明するのだ！！」

「「「「「イエッサー！！！！」」」」」」

この日、この国の歴史に名を残すことになるのは・・・誰であろうか？

続

おまけ

更新遅れましたorz

拙いこの作品を読んでもらっている皆様本当にありがとうございます

構想はとっくにできててんだけど文章にまとめるのがものすごく難しかった
何度も何度も書き直したり最悪1から全部練り直したり、バイクで事故ったり・・・

後編はもうちょっと早めに仕上げたいと思います

・・・できるだけorz

コルトのことはもうしばらくしたら物語にして色々話します

むしろ本編そっちのけで番外やら学園パロディネタばかり考えたりしていた（反省）

学パロ作った時の想像

大学か高校かで結構悩んだが結局高校生になってもらった

ジン／2年生・学ランを改造した中ランを着用

二刀流の代わりに木刀携帯・学園の番長的存在（マガ○的ヤンキー）

勉強はできる方・女子力が高い

父親が剣術道場の師範・家にいる時は着流しを愛用

ご先祖様は武家の家系と教えられたが真偽は定かではない

アゲート／2年生・上着は腰に巻いていつも柄シャツ＋Yシャツ＋腕まくり

ブレスレットやピアスで着飾る・チャラ男（ジャン○的ヤンキー）

勉強はできない・友好関係が広い・北海道生まれ

女子とは友達以上の関係を築けない残念なタイプ

現在アパートで独り暮らし・実家は畜産農林業を営む

ジェット／2年生・ブレザー＋ネクタイを気怠く着る

運動部所属・スカートの下はジャージ（田舎の不良娘）

体育系の脳筋だがオカルトに興味あり

オシャレよりゲームに金つぎ込むタイプ

喧嘩もできる・カリスティックや棒を愛用

ドクター／3年生・Yシャツの上に白衣を羽織ってる

手にシリコンバンド着用・昼休み保健室に入り浸る（保険医気取り）

両親は病院勤務の外科医と小児科医・校内全教科トップ成績

オタク+陰湿＝最悪・でもリア充

懐には常時全生徒の弱みを書き連ねた脅迫手帳を所持

虎眼／3年生・上着は着ないでYシャツのみ＋リストバンド

留学生・中国人と間違えられがちだが正しくは香港人

学園の裏番・猫眼の双子の兄貴（チャン○オンのヤンキー）

実家の古流拳法使い、ブルース・リー派

体力測定の成績は学園内ぶっちぎりトップ

猫眼／3年生・ブレザー＋リボン普通に着る

スカートの下はスパッツ・ドクターの彼女（バカカップル）

虎眼の双子の妹・本人は姉貴だと思ってる

腐女子、ジャッキー・チェン派

武術の心得は持っており拳闘の虎眼に対し足技を得意とする

コルト／1年生・学ランを普通に着るがボタンは閉めない

極道組織親分である祖父の孫・普段は典型的草食系男子

時々突然キレル二重人格保有者（ア○ーズ的ヤンキー）

モデルガン収集が趣味・サバゲーはしない

両親は海外の事業家・意外とお坊ちゃん